

氏名（本籍） 村上達也（東京都）  
 学位の種類 博士（心理学）  
 学位記番号 博甲第 6972 号  
 学位授与年月 平成 26 年 3 月 25 日  
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当  
 審査研究科 人間総合科学研究科  
 学位論文題目 児童期中・後期におけるアタッチメントの内的作業モデルの構造と発達への影響—機能的アプローチによる検討—

|    |         |          |       |
|----|---------|----------|-------|
| 主査 | 筑波大学教授  | 教育学博士    | 櫻井茂男  |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士（心理学）  | 湯川進太郎 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士（心理学）  | 佐藤有耕  |
| 副査 | 筑波大学教授  | 博士（人文科学） | 安藤智子  |

## 論文の内容の要旨

### （目的）

本論文の目的は、児童期中・後期においてアタッチメントの内的作業モデルがどのように構造化されているのか、および児童期中・後期のアタッチメントの内的作業モデルがどのように発達に影響を及ぼすのかについて実証的検討を行うことであった。この検討を行うにあたって、アタッチメント機能を果たしている人をアタッチメント対象とする機能的アプローチを採用した。

### （対象と方法）

本論文では 8 つの実証的な研究を行った。研究 1 から研究 3 では、小学 4 年生から小学 6 年生を対象に児童期中・後期におけるアタッチメント対象を検討した。研究 4 では、児童期中・後期におけるアタッチメント対象の移行および拡大について、メタ分析を行い検討した。研究 5 と研究 6 では、小学 4 年生から小学 6 年生を対象に児童期中・後期におけるアタッチメントの内的作業モデルの構造について検討した。研究 7 では、小学 4 年生から小学 6 年生を対象にした縦断調査によって、研究 8 では、中学生、高校生、大学生を対象にした回顧法調査によって、アタッチメントの内的作業モデルが発達に及ぼす影響について検討した。

### （結果）

研究 1 では、機能的アプローチに基づく児童用アタッチメント対象指名尺度の作成を、研究 2 では、機能的アプローチに基づく児童用アタッチメント機能尺度の作成を行い、児童期中・後期のアタッチメント対象を検討した。研究 3 では、児童期中・後期のアタッチメント対象の人数とその関係性の検討を行った。そして、研究 4 では、児童期中・後期の特徴の一つであるアタッチメント対

象の変化について検討した。これらの研究の結果、児童期中・後期には、個人によって異なる複数の多様な関係性がアタッチメント対象に成りうることが示された。また、この時期の子どもは、平均して 3 人程度のアタッチメント対象を持つことが明らかにされた。さらに、アタッチメント対象が家族内の関係性から家族外の関係性へ移行しつつあることが示された。次に、研究 5、研究 6 では機能的アプローチに基づいて同定されたアタッチメント対象に対する内的作業モデルの構造が検討された。これらの検討の結果から、この時期の内的作業モデルの構造は、統合的組織化モデルのように構造化されていることが明らかにされた。そして、研究 7、研究 8 では機能的アプローチに基づいて同定されたアタッチメント対象に対する内的作業モデルがどのように発達に影響を及ぼすのかについて検討された。研究 7 では 8 ヶ月後の発達に対するアタッチメントの内的作業モデルの影響が縦断調査によって検討された。また、研究 8 では、青年期前期、中期、後期の発達に対するアタッチメントの内的作業モデルの影響が回顧法調査によって検討された。これらの検討の結果、児童期中・後期の個別対象に対する内的作業モデルは全体的モデルとして統合され、その統合されたモデルを介して、後の発達に影響することが明らかにされた。

#### (考察)

以上、本論文から得られた知見を集約し“機能的アプローチに基づく、児童期中・後期におけるアタッチメントの内的作業モデルの構造と発達への影響モデル”が作成された。このモデルでは、まず、アタッチメント機能を十分に果たしている人物がアタッチメント対象とされる。そして、それらの人物に対する内的作業モデルは、一つの全体的な内的作業モデルとして統合され、さらに、その統合された内的作業モデルが後の発達に影響を及ぼすとされる。このモデルから、児童期中・後期の子どもが持つ、全体的なアタッチメントの内的作業モデルは、この時期に獲得する新しいアタッチメント対象に対する個別の内的作業モデルの影響を受け、変化しうることが示唆され、アタッチメントの質の変容を説明可能な新たな仮説モデルが生成された。

### 審査の結果の要旨

#### (批評)

本論文は、近年欧米において注目を集めている児童期中・後期のアタッチメント研究を、機能的アプローチというアタッチメント対象の捉え方に関する新たなアプローチによって行った、先駆的でかつ独創的な論文である。また、得られた知見を積み上げ、最終的に導かれた“機能的アプローチに基づく、児童期中・後期におけるアタッチメントの内的作業モデルの構造と発達への影響モデル”は、学術的な貢献のみならず実践的な意義を有している点も高く評価できる。今後の課題としては、学校や家庭などの状況・文脈要因を考慮した調査を行い結果を確認すること、提出されたモデルについて観察法、実験法、面接法等による検討を行うこと、などが挙げられる。

平成 26 年 1 月 21 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。